

# 定山溪の天然芝グラウンド

長持ちの秘訣は、使った人が小まめに手入れすること

定山溪温泉街に天然芝の広大なグラウンドがある。この施設はラグビーの練習や、定山溪で行われるイベントなどに使用されている。温泉街に芝生のグラウンドという何とも不思議な組み合わせに興味を持ち、実際に足を運んでみた。

グラウンドは温泉街の中心部から500メートルほど北西に行った三笠スキー場の隣に位置している。グラウンドに立つと、周りにそびえ立つ山々を見ることができる。温泉街から少し離れているため、周りに建物は少ない。グラウンドは、夏の山々と同じような緑色で、芝目もきれいに整っており、徹底的に管理されていることが窺えた。

このグラウンドは現在、北海道バーバリアンズというアマチュアのラグビーク

ラブを活動の母体とするNPO 法人が所有しており、ここを拠点にしている。バーバリアンズがこのグラウンドを手に入れた当時、芝は傷んでおり、ところどころ芝の下から土が見えるほどであった。そんな状態のグラウンドからどのように今の状態にもっていったのか。それはバーバリアンズが芝の管理のためにお願いした、ある会社の協力とアドバイスがあった。

その会社は、北日本ターフマネージメントといい、芝の管理等の業務を行っている。昨年バーバリアンズから定山溪グラウンドのことを相談された同社社長の阪内和也さんは、バーバリアンズのメンバーの人たちの、自分たちでグラウンドを管理したいという目標に感銘し、協力を申し出た。現在も、草刈りや肥料まき、

水撒きといった作業をターフマネージメントの指導のもと、バーバリアンズのメンバー自身が行っている。努力が実り、かつてのグラウンドから今のような姿に、2ヶ月程であったという。

天然芝のグラウンドは、北海道に数多くある。その理由の一つとして阪内さんは、「使い手の意識によって天然芝は、実は人工芝よりも安く維持することができるから」という。

手入れが楽なように見える人工芝だが、初期の導入に莫大な費用がかかる上、利用状況によっては、耐久性もそれほど長いとはいえない。劣化してきても部分的に直すのが難しいというデメリットもある、という。

天然芝は、毎回手入れが必要になり、人の手でこまめに管理することが必要になる。使用する人間にも、自らがえぐってしまった芝を元に戻したりと、使い手の「意識改革が必要」というが、手をかければ末

永く使えるのが強みだ。

実際にこのグラウンドを体で感じてみた。座ったり走ったり、あるいはただ立っているだけでも、芝のいい香りがした。まるで自然に溶け込んでいるような感じを受け、非常に気持ちが良い。また、芝自体がとても柔らかく、転んでも痛くないため、思いきり体を動かすことができた。怪我をする心配が少ない分、多くの人、特に子供達にここを使ってほしいと感じた。

ここは一般の人にも無料で貸し出しを行っており、北海道バーバリアンズの公式HPから申し込みが可能となっている。(※グラウンドの利用にはバーバリアンズクラブカードに入会が必要。年会費、入会金は無料)問い合わせは北海道バーバリアンズラグビーフットボールクラブ事務局、011-631-3125まで

(文・小澤慎) ■



右の写真がバーバリアンズがこのグラウンドを手に入れたときの状態。これが上の写真のようになった。(写真はいずれもバーバリアンズ提供)



# ラベンダー栽培、ここに始まる

南沢・麻田農園の麻田美枝子さんに聞く



南沢で栽培が行われていたころのラベンダー畑 (写真は麻田美枝子さん提供)

「ラベンダー栽培発祥の地、南沢」、意外と地元の札幌市民でも知らない人が多い。始まりは昭和12年。曾田香料株式会社の創業者、曾田政治氏はフランスからラベンダーの種子5Kgを取り寄せ、札幌、長野、岡山など日本各地で試験的な栽培を行った。その中でいちばん栽培に適した土地として選ばれたのが札幌だったのだ。

そこで同社は、昭和15年に、今の南沢地区の約16ヘクタールの土地を取得し、山の斜面で、ラベンダーの栽培を始めた。

ラベンダー栽培地の近くに麻田農園を経営していた麻田家は、家族が曾田香料

の社員になるなど、一家をあげて栽培に協力し、日本初のラベンダーオイルの抽出に見事成功したのは昭和17年だった。

当時、曾田香料職員として、ラベンダーの栽培や蒸留の作業を取り仕切った麻田農園の麻田志信氏の妻で、今も南沢に住む麻田美枝子さんは、「16、17歳頃から一緒に携わってきたものだったから、できたときは本当に嬉しかった」と当時を振り返った。

しかしその後、第二次世界大戦が始まった。国の食糧増産の政策で、ラベンダー畑は転作を余儀無くされたが、品種の保存は続け、戦後に栽培を再開した。

このころからラベンダーオイルの生産は最盛期に入った。山の斜面全体が、薄紫一色に染まり、甘い香りが立ちこめ、「周囲から見学に来る人が絶えなかった」と美枝子さんは話す。しかし、自身はラベンダー栽培に忙しく、斜面を一望できる一番眺めのよい場所からは、ラベンダー畑を見た覚えがないそうだ。

時が経つにつれて、外国から合成香料が安く手に入るようになり、国産香料の需要は減っていき、ラベンダー栽培面積は減少の一途をたどり、国産香料としてのラベンダー栽培は途絶えてしまった。

「ラベンダーの栽培が終わってしまっ

ても残念だと思ってもない」と、美枝子さんは言う。「今でもラベンダーは大学のキャンパスや南沢には残っている」と明るく話してくれた。

日本のラベンダーの歴史が南沢で始まり68年、現在ラベンダーは富良野を始め、北海道で観光資源として根付いている。美枝子さんは、今は観光客の1人として毎年富良野を訪れ、ラベンダーのつながり親交のある「ファーム富田」の富田忠雄会長を訪ねているという。「富良野がラベンダーの観光名所となっているのは素直に嬉しい」と、「心の底から喜んでいる」のだという。(文・磯部恭兵) ■

## SOUTH SAPPORO STAMP COLLECTION 南区・集印指南 その三



### ラベンダー栽培発祥の地

東海大学札幌キャンパスには、大学のある南沢地区が日本のラベンダー栽培発祥の地であることを記念して、約3600株のラベンダーが植えられ「ラベンダーキャンパス」として整備されている。開花時期は多くの見物客でにぎわう。スタンプには、背景に藻岩山、右側にラベンダー、左側にはニセアカシアの花と蜜蜂。このあたりはニセアカシアの樹が多く、おいしい蜂蜜も取れる。スタンプ直径約7センチ。

設置場所：東海大学札幌キャンパス正門脇の守衛所に、ラベンダーの咲く頃に期間限定で置かれる。例年6月下旬から7月後半位。  
南区南沢5条1丁目1-1 東海大学札幌キャンパス  
※南区内にある素敵なスタンプを探しています。「これぞ!」というものがありましたら、ぜひ編集部までお知らせください。san-news@htokai.com